

平成 29 年度技能伝承に取り組む企業の好事例発表及び意見交換会について
(ITを活用した生産性向上の取組みを実施する企業の好事例発表及び意見
交換会と同時開催)

若年者の人材育成に取り組む企業の事例発表及び意見交換会

1. 日 時 平成 29 年 10 月 20 日 (金) 13:30~15:30

2. 会 場 斐川企業化支援センター 研修室

3. 参加者

コーディネーター 株式会社社長室 井脇 寛 代表取締役
(中小企業診断士/島根職業能力開発センター：コンサルタント)

事例発表企業

- ①アケボノ株式会社 代表取締役 吉部 大史朗
我が社の「人財育成・社内教育をどうして学んだこと」
- ②島根電工株式会社 教育課長 山本 翔
島根電工グループの若年社員育成について

ITを活用した生産性向上事例発表企業

- ①株式会社島根富士通
生産技術部担当課長(設備開発担当) 廣野 慎一
ICT・IoTを活用した生産性向上の取組

聴講者 12社 15名



4. 事例発表の概要

事例発表① アケボノ株式会社

業種：製造業（金型製作）

特徴：①平均年齢 39 歳。 → 3 年後 36 歳 と若い企業

内容：②経営オープン化による全員参加型（社員持株制度導入）

アメーバ経営

③人材不足（高齢化） ④タイ進出

③・④により人材を人財に変えるため、木鶏会の活動を社内に入れ、②に対応出来る人づくりを目指す。

事例発表② 島根電気株式会社

業種：建設業（電気・水道業）

内容：「人材育成こそ会社発展の必須条件である」

① 1～3 年次の社員教育

② BB 制度（ビックブラザー） 新入社員 1 人につき、世話係の先輩社員（若手）を 1 人専任し、6 ヶ月間公私ともに面倒をみる。（仕事も一緒）

早く社会に馴染むとともに、仕事を一緒にすることにより公私の相談することが可能。 更に先輩社員も成長の機会となる。

③ 管理者研修や役員研修も実施。

事例発表③ 株式会社島根富士通

業種：製造業（パソコン製造）

内容：①部品ピッキング効率化

② 製品の所在・製造状態の見える化

③ 未再現障害の低減

・・・に ICT・IoT を活用し、生産性向上の取組む

吉部社長



山本課長



廣野課長



5. 意見交換会

井脇コーディネーターより、各発表者に対し、補足意見と質問を行った。

① アケボノ（株）

- ・ 40歳代の人材が85%を占めている。若者を惹きつける秘訣は？
→ 自分が率先して、いろいろな場で採用活動を行っている。
- ・ 若者育成の秘訣は？
→ アメーバ経営と木鶏会も大きいですが、自分の役割としては“人間のハート”の部分をできるだけ言って指導するようにしている。

② 島根電工（株）

- ・ 建設業ではなく、サービス業との理念の下、心がけていることは？
→ 自社事業をそういう風に定義したことが大きい。その理念の下、電気工事の差別化（マナーの差）ができたのだと思う。
- ・ BB制度の他に心がけていることは？
→ 若年者は3年間で10回のOJT研修を行う。また、管理者や役員にも定期的に研修会を行っている。更に、入社3年目までの社員には家族懇親会を年1回開催し、家族の方々にも当社への理解を深めて頂いている。

③ （株）島根富士通

- ・ 製造業におけるIoT、ICTの活用について、主に紹介して頂いた訳であるが、人材育成面ではどのようなことに留意しながら進めているか？
→ ICTが進めば進むほど、人の存在が重要になってくる。機械の効率化ばかりでなく、業務の効率化に向け、若年者向け、熟練者向け、班長等の管理者向け、各種階層別の研修制度も勿論行っている。その中でも、作業面を重視したOJTには心を砕いている。
- ・ その中で、特に若者層育成のポイントがあれば教えて頂きたい？
→ 特に意識したものはないが、やはり上に立つ人の意識の持ち方が若者の意識に大き

く影響すると思われる。そういった意味では、OJTを通した個人別の指導に重点を置いて指導している。



6. 全体総括（コーディネーター）

メインのテーマが「若年者の人材育成に取り組む企業の事例発表」であったから、1社製造業のICT活用の生産性向上の事例は少し違和感があったが、主題の方向に話をまとめていった。今日発表のどの企業も地域では有力企業であり、人材もそれなりの数と質が確保できる企業である。これら企業の事例を、全くの他所の事例とせず、自社の採用と育成に活かすことが肝要となろう。

特に、若年者の継続的な研修制度、担当を持たせる制度（ここではBB制度）、社内でのグループ制、持ち株制度等は大いに参考となろう。日々の忙しさにかまけていては、折角獲得した若者がすぐに退職してしまう。近年の売り手市場では尚のことである。

今回の事例発表を1日の他社発表会のヒアリングで終わることなく、これを契機に是非参考として一つでも実行に移してもらいたい。